

共同研究を終えて

佐藤 信

金鉉球教授の論文を読んで

『日本書紀』の記載自身を通して、6世紀の倭と百済・加耶両国との関係について計量的・内容的に分析し、倭と百済との密接な関係を軸として6世紀の日韓関係史が展開したとする重厚な論文である。古代の日韓関係をみる際にそのまま信じることはできないとみられがちな『日本書紀』の記載自身を疑うことなく分析して、倭と百済、倭と加耶の外交関係を検証するという、『日本書紀』の論理に迫る方法は、まず行われるべき手続きであり、その点で有難い研究成果と考える。

あえて意見を述べさせていただけば、共同研究の場でも申し上げたように、以下の諸点について気になるところがあった。まず、『日本書紀』の論理と6世紀の日韓関係史の実態とは必ずしもイコールではないという点。すなわち、『日本書紀』編纂過程では、加耶は遠い昔に滅んでしまっていた国であるのに対して、百済は唐・新羅の攻撃により滅亡したばかりで、倭に多くの貴族たちが渡来して『日本書紀』編纂にも影響を及ぼしたと考えられ、『日本書紀』の朝鮮半島関係記事が百済中心になることは自然の成り行きという面がないかという点である。また、国家間の外交関係について軽重を量ることはできないのではないかという点も、気になった。多国間の多元的な外交を視野に入れる時、倭にとって高句麗・百済・新羅・加耶そして中国南北朝の諸帝国との関係は、いずれもそれぞれ重要であったろうし、例えば遣使史料の多寡が外交関係の軽重をそのまま反映するとは限らないのではないか、という点である。

しかし、『日本書紀』の論理をさぐっていただいた論文の意義は、改めて確認したい。今後、考古学的な発掘調査の成果、とくに出土文字資料などによって、6世紀の日韓関係史がより客観的に見通すことができるようになり、『日本書紀』の史料批判が進ことを期待したい。

座談会を終えて

日韓歴史共同研究委員会第1分科会における、4世紀・5世紀・6世紀の日韓関係史とこれからの日韓関係史の研究に向けてをテーマとした座談会を終えて、感じたところを率直に述べたい。

まず座談会を通して、「日本の研究者」と「韓国の研究者」（とくに座談会参加者の誰というわけではなく、雰囲気として感じた日韓両国研究者それぞれの「立場」のようなものである）との間に、なかなか越えられない深い溝がまだまだ横たわっているのではないかという認識と、それでも歴史を学ぶ研究者として同じ土俵で共同研究を行うことによって溝を狭めつつ豊かな成果が挙げられるだろうという予感との両方を感じた。

とくに史料に向かう以前の歴史観の面で前者の溝を感じる事が多く、史料にもとづく実証的研究の面では、後者の予感を感じる事があったように思う。その点では、先入観としての歴史観から史料解釈を押しつけ合うのではなく、史料にもとづいて説得力ある歴史像を組み立てていく方向での共同研究が望まれよう。

また、溝を前提としつつもそれを乗り越えて豊かな共同研究の成果を実現するためには、古代までさかのぼらない近代国民国家（「日本」とか「韓国」）の枠組みを取り払い、自立した研究者個人としての

立場で歴史史料と公平に向き合う共同研究を続けていくことが必要なのではないかと考える。

その意味では、今回の共同研究はまだはじまりでしかない。未熟な今回の成果の上に立って、これからの若い世代の日韓の研究者の時代には、国家や「優越意識」にとらわれない形で自然に公平な共同研究や研究交流が進められるようになることを期待したい。